



笑顔いっぱい かがやく入谷っ子

土曜参観日

6月4日(土)に土曜参観を行いました。新型コロナウイルス感染症対策により、参観の仕方を分散にさせていただく中での実施となりましたが、多くの方にお越しいただき、感謝申し上げます。

また、学校運営協議会の委員4名の方が来校し、3校時目の様子を参観してくださいました。私もクラスの様子と一緒に参観をいたしました。どの学年も落ち着いて学習に取り組んでいました。1日に1回は校内を回り、子供たちの様子を把握するよ心がけていますが、いつも以上に子供たちが一生懸命に課題に向き合う姿が見られました。保護者の皆様が見に来てくださることが、子供たちの励みになっていると考えます。

委員の方からは、「子供たちから学ぶことができた」「子供たちの主体性を引き出すことができるものは何かを考えて、導きたい」「自分の意見をみんなの前で表現することができて素晴らしい」「子供たちの様子を知ることができた」「有意義な時間だった」という御言葉をいただきました。具体的な話として、4年生で行っていた辞書引きの学習について、ICT機器で調べればすぐに分かることではあるけれど、自分で考えて辞書を引くという学習は大切なものであるとお話されていました。また、6年生の防災学習で、学校が避難所になったら、受け入れをどうするか、受け入れ者をどう配置していくかについて、グループに分かれて議論をしている学習を参観された後、避難所開設として学校を使用する際には、子供たちの視点が活かせるのではないかと

子供たちは自主的に素晴らしい行動をするのではないかという話があがっていました。

不易と流行という言葉がありますが、委員の方々との話を通して、教育にとって不易の部分は何かを考えていくことを忘れてはいけないと思いましたが、社会の課題を子供たちと共有し、課題解決に向けて、子供たちの考えや見方を生かして形にできないものかと考えさせられました。

今後も、保護者の皆様や地域の皆様と子供たちの様子を話し合ったり、共有したりすることを大切にしていきたいと思えます。

瞬間を利他の精神で生きる

読売新聞「あすへの考」に、若松英輔氏の記事「利他の精神」が掲載されていました。利他という言葉は、9世紀初頭、最澄と空海によって日本で用いられるようになったとのこと。最澄は、自らの立場を忘れて困難や苦しみを引き受け、よきことを他者に渡していく「忘己(もうこ)利他」を説き、空海は、自分と他人の繋がりを軸にすえ修行で自己を深めることと他者の救済は一つであるとする「自己利他」を説いたとのこと。いずれも憧れる生き方ではありますが、持続的にどう実践できるのかと考えながら読み進めました。

「他者との繋がりの中に自己を見つめ直しつつ、利他的な人生ではなく、利他的な瞬間を生きる」という若松氏の言葉に、大変納得いたしました。「温かい言葉 かけてみませんか」という若松氏。人との繋がりの一瞬一瞬の中に、皆が利他の精神を取り入れることが平和を創り出すことに繋がるのではないかと思います。子供たちに伝えたい視点です。